



上田八木マーケットレポート(2016年6月)

～増加基調にある無担保コール市場残高

2016年6月1日(水)
上田八木短資株式会社

1. 国内経済情勢

(経済・景況判断)

3月の景気動向指数(CI)一致指数(改定値)は、前月と比較して0.5ポイント上昇し111.2となった。政府は5月の月例経済報告で、国内景気は「このところ弱さもみられるが、緩やかな回復基調が続いている」とし、2カ月連続で基調判断を据え置いた。国内景気の先行きや海外景気の判断も維持し、平成28年熊本地震の経済に与える影響に十分留意する必要があるとした。

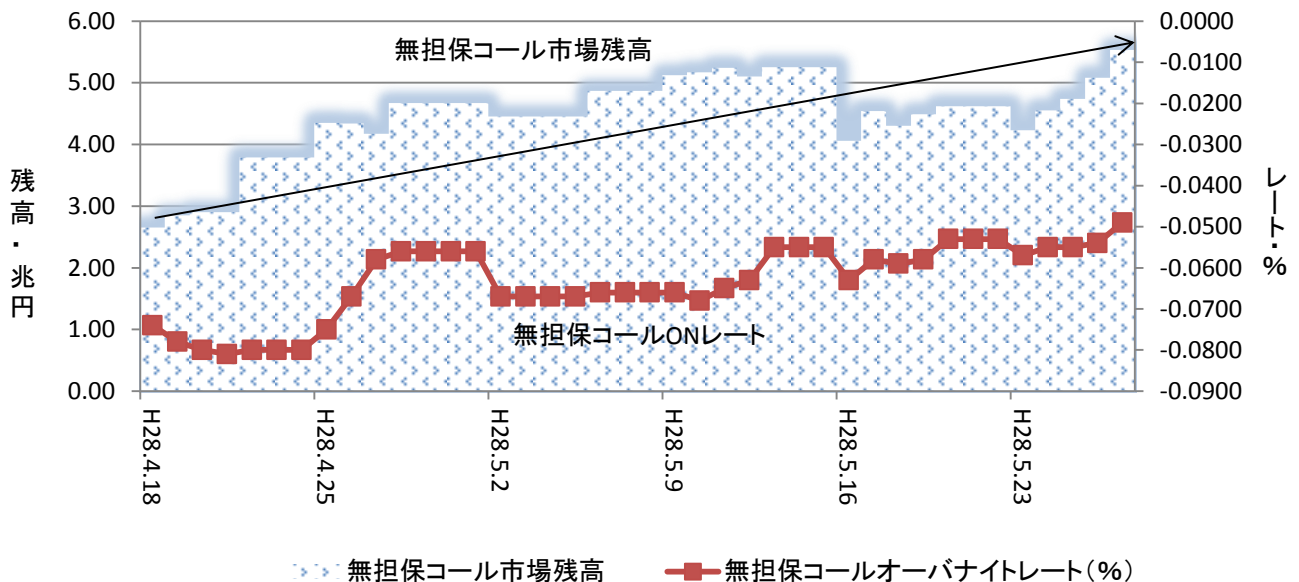
4月の消費者物価指数は、生鮮食品を除いた総合で前年同月比0.3%下落、食品及びエネルギーを除く総合は前年同月比0.7%上昇となった。

2. 短期金融市場の動向

(5月の短期金融市場動向等)

5月の無担保コール・オーバーナイト・レートは加重平均レートの推移を見ると、月の前半の11日頃まで▲0.06～▲0.07%と前月と同水準で推移していたが、16日の新しい積み期間に入ってから▲0.04～▲0.06%と若干上昇傾向にある。日銀当座預金に0%の金利が適用されるマクロ加算残高に余裕のある金融機関が増え、資金調達圧力が強まったからであると推測される。この資金調達意欲の増大により、無担保コール市場残高は増加基調にある。債券レポGC・TNレートについては、東京レポレートで▲0.05%～▲0.09%のレンジで推移しており、前月とほぼ同水準の取引となった。オープン市場では、CPの発行レートがa-1格の銘柄で0%近辺と前月と同水準であった。TB 3Mについては、26日の入札で、平均落札利回りが▲0.2729%と過去最低を更新した。

無担保コールONレート(右軸、折れ線)と無担保コール市場残高(左軸、棒面積グラフ)



(6月の短期金融市場見通し)

短期金利水準に大きな変更はないため、引き続き、無担保コールオーバーナイトレートや債券レポGCレートは、積みの進捗とマクロ加算残高の余剰を睨みながらの動きが予想される。9日にも発表されられると思われる、6～8月の日銀当座預金マクロ加算残高の基準比率が注目される。また、6月は国債の大量償還が予定されているので20日前後の債券レポ金利に動きがあるか注目したい。CPIについては依然として0%近辺の発行が大勢を占める動きが継続しそうである。

3. 海外経済情勢

(金融政策)

米連邦準備制度理事会(FRB)が18日公表したFOMC(4月26日、27日開催)議事録によると、大半の政策当局者は経済の改善が続いた場合、6月の利上げが適切になるとの認識を示した。また、イエレンFRB議長は27日、ハーバード大学での討論会で、「金融当局が時間をかけて緩やか、かつ慎重に政策金利を上げていくことは適切だ」とし、「今後数カ月のうちに追加利上げが正当化されるだろう」との認識を示した。次回FOMCは、6月14日、15日に開催予定。

(経済・景況判断)

米国では、4月のISM製造業景況感指数が50.8となり、前月から1.0ポイント低下した。景気拡大・縮小の節目である50を上回ったものの、4カ月ぶりに前月比低下する結果となった。「雇用」項目は上昇したものの、「新規受注」項目が大きく低下した。4月の非農業部門雇用者数は前月比16万人増と7カ月ぶりの低い伸びとなったが、賃金は前月比0.3%増、前年比2.5%増と上昇の兆しがみえてきた。失業率は前月比横ばいの5.0%。

5月のユーロ圏製造業景気指数(PMI)速報値は51.1と前月から0.6ポイント下落した。4月の中国製造業景気指数(PMI)は50.1と前月比0.1ポイント下落。景気判断の節目となる50をкаろうじて上回る結果となった。

4. 海外市場動向

米10年国債利回りは、小動き。同利回りは過去3カ月1.7%～1.9%程度でレンジ推移している。短期債利回りは緩やかに上昇し、イールドカーブ形状はフラットニング。

海外株式は、揉みあい。原油価格は回復地合いにあるが、エマージング株式は総じて動意乏しい展開が続いている。

為替ドル円相場は、弱含み後反発。一時105円台まで円買いとなったが、円買いの勢いは続かず月末にかけて110円を超える展開となった。

5. 今月の注目点

『日米短期金利差拡大』

6月の注目材料は、14～15日の米連邦公開市場委員会(FOMC)、及び15～16日の日本銀行金融政策決定会合。日本銀行がマイナス金利導入等「超金融緩和策」を推進する一方、米国では昨年12月以来の追加利上げが視野に入りつつある。2極にある先進国金融政策(引き締めvs緩和)が再びクローズアップされる見通し。

昨年12月、米国はほぼ10年ぶりの利上げに踏み切った。その前後、相場でも最も動いたのは為替。ドル高が進み対円で124円近辺まで上昇した。それから半年が経ち、日米短期金利差(2年国債利回り差)拡大にともない為替は再びドル買い基調になっている。当面、市場ボラティリティは大きい順に、為替>株式>金利 となるだろう。

本資料は投資環境等に関する情報提供を目的として作成したものです。本資料は投資勧誘を目的とするものではありません。有価証券等の取引には、リスクが伴います。投資についての最終決定は、投資家ご自身の判断と責任においてなされるようお願いいたします。当社は、いかなる投資の妥当性についても保証するものではありません。記載された意見や予測等は作成時点のものであり、正確性、完全性を保証するものではなく、今後予告なく変更されることがあります。

上田八木短資株式会社

登録金融機関 近畿財務局長(登金)第 243号

大阪本社 〒 541-0043 大阪市中央区高麗橋 2丁目 4番 2号

東京本社 〒 103-0022 東京都中央区日本橋室町 1丁目 2番 3号

加入協会 日本証券業協会